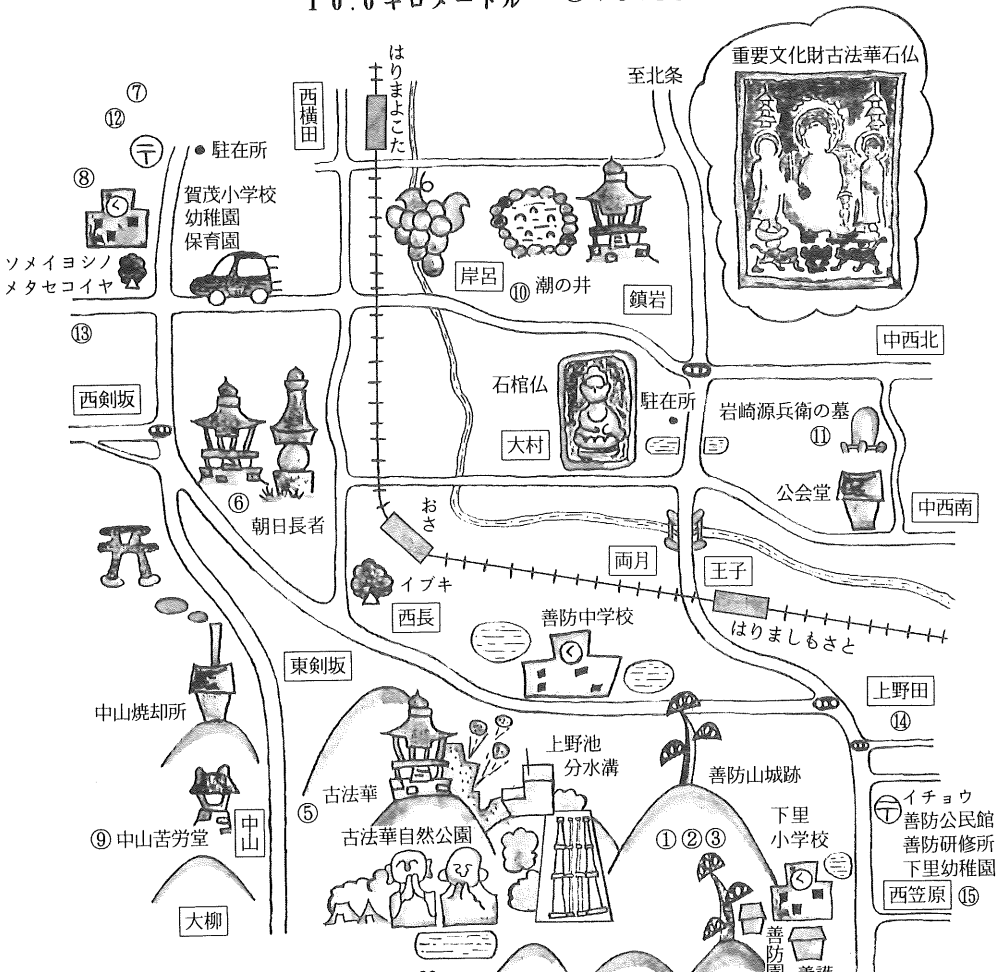
4　善防山城跡と古仏

10.0キロメートル

① 火攻めで落ちた善防山城…… 85
② 小谷城と善防山城……306
③ 幕府の赤松攻めにも
　　くじけなかった善防の殿様……310
④ おさんどさん…… 87



⑤ 古法華…… 89
⑥ 朝日長者…… 92
⑦ 御車…… 94
⑧ 田富山田福寺…… 95
⑨ 中山の苦労堂…… 96
⑩ 潮の井（ブツブツ）…… 98
⑪ 加西武士の意気を示した
　　岩崎源兵衛、浦上久松……324
⑫ いぼとり権音さん……100
⑬ つるぎの宮の由来……101
⑭ しょうぶの節句……101
⑮ あごなし地蔵……102

・古法華石造浮彫如来と脇侍像（国重要文化財）

奈良時代前期（八世紀初）の製作で、日本でも最古の石仏です。
技法的にもきわめてすぐれていて、層塔や動物などが加わり、大陸的、本格的な構成になっています。白鳳仏教美術の代表作といえます。

・大村石仏（市指定文化財）

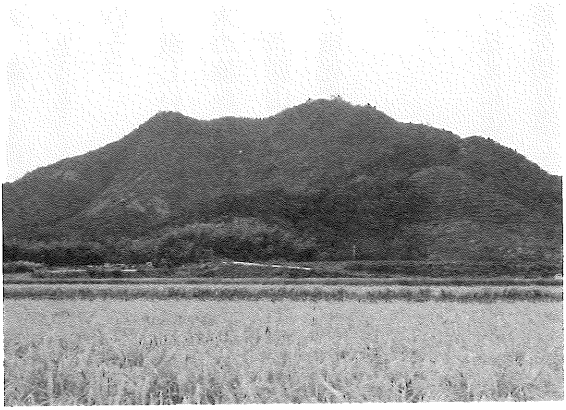
康永元年（一三四二）の刻銘がある石棺仏でのびのびとした彫法のあるものです。

・常行院石造七重塔（市指定文化財）

姿がよく整った高さ二・五メートルの七重塔で保存もよく、宝徳三年（一四五一）の刻銘とともに大切な遺品です。

火攻めで落ちた善防山城

嘉吉の乱（一四四一）による戦（いくさ）は、山名、細川軍の大勝に終り、善防山城主赤松刑部介則繁（ぎょうぶのすけのりしげ）は、戸倉で宿敵山名軍と戦ったがかなわず、海路九州を経て朝鮮へ逃れた。



この時、善防山城も山名の軍勢にとりかこまれ、激しい攻防が繰りひろげられた。城に残った善防方は、山名軍が攻め登れないよう、油をつけた竹の皮を一面にしきつめて応戦したという。全山がすべりやすい岩塊から出来ている善防山、そこへ油をつけた竹の皮をしかれてはたまらない。登ろうとして足をとられる山名軍に、上から弓を引いて抵抗した。このためさしもの山名の荒武者も、なかなか城を落とすことが出来ず、弓にたおれる兵士の数は増える一方、むなしく山裾をかけめぐるのみで、二日、三日と暮れていった。

時も時、攻めあぐんでいる山名軍に、

「火をつければ、城を落とすのはたやすい」

と、進言する者があり、ただちに火が放たれた。火は見る見る全山を包

み、勢いを得た山名軍は、どっとときの声を上げて、城に攻め登った。

もうもうとたちこめる煙と、飛び散る火の粉の中で、善防方は次々に倒され、またたく間に城は落ちたという。

激しい戦の跡も、時の流れに包みこまれて、昔をたどるすべさえ失せてしまったが、大正時代の頃までは、木の葉かきの熊手に、各所にうずまっていた白骨体が姿を見せたと聞く。

善防山を一目で見わたせる鶉野の一角に、「塚まち」という田があり、この田の中央の塚には、善防山城の戦死者がまつられている。

（播磨郷土研究第十四号及び内藤政男氏の話より）

伝えによると、赤松満祐が時の将軍足利義教を暗殺したとき（一四四一）、背後から一刀のもとに将軍の首を切り落したという豪の者安積行秀は、赤松一族とともに都をおちのび善防山に身を寄せていたという。赤松追討軍の山名氏によって城が落ちたとき、逃れて剣坂で身を隠しながら時のくるのを待ったといわれる。

なお、両月町には、「殿垣内」と呼ばれるところがあり、そこにある稲荷神社は、かつて善防山城主則繁が祀って信仰したお宮と伝えている。

（加西郡誌より）

おさんどさん（三口町）

法華山一乗寺は、西国三十三ヶ所の霊場のうち二十六番の札所として有名です。今でも巡礼の人たちの姿があとをたちませんが、昔は、それはそれはたくさんの人たちがお参りしたものです。その中に「おさんどさん」と呼ばれる人たちがありました。

年二回、きまって春と秋に西国三十三ヶ所を巡礼しているのです。何でも、自分や家族のものにたいそう不幸なことが続いたために発心して仏につかえ、精進によって功徳を受け、冥福を得ようと仏門に入った人たちなのだそうです。お坊さんの中でも一番位の低い修行中の人たちといっていいでしょうか。

和歌山には、おさんどさんの庵があったと聞いていますが、そこから三十三ヶ所の巡礼に出てくるのです。加東の清水寺から一乗寺への巡礼道にあたっていた三口町では、法華山詣の人たちがたくさん通りました。その中に、おさんどさんと呼ばれる人たちが数十人もおられたのです。おさんどさんは、毎年のようにやって来ては、あらかじめ決っている街道ぞいの家に一人ずつ泊っていったのです。鴨川に泊って清水寺に詣り、三口や坂本に泊って法華山から書写へと巡っていくのです。

泊める家ではもう、おさんどさんと家族同様になっていましたから、特別なもてなしは全くしませんし、農繁期などで留守にしていても、おさんどさんの方で勝手にあがりこんでいることもしばしばでした。おさ

んどさんは、わらじをぬぎ、足を洗うと、仏だんの前に背負って来たおせた（背のうのようなもの）を降ろして、中から三十三ヶ所霊場の本尊を模した一寸（三センチメートル）ばかりの仏像を取り出し、並べて美しく飾ります。旅の話などをしながら夕食をとった後、みんなを集めてこの仏像を並べた前でお経をあげる習わしでした。その夜は仏前でやすんだおさんどさんは、朝早く起きて仏像をおせたにしまい、お礼をいって旅立つのですが、必ずその日のお弁当と新しいわらじを用意してあげることにしていました。

おせたを背負わせてもらうと、一年間息災でいられるというので、かわるがわる背負ってみたものですが、ずいぶん重くて、人の手を借りないとうまく歩けなかったことをおぼえています。

いつのころからか、このおさんどさんも姿を見せなくなってしまいましたが、今でも、ひょっこりたずねてはくれないものかと心待ちする気持が残っています。

（幸田幸一氏の話より）

古法華（両月町外）

奈良朝時代の前後、法華山一乗寺とともに栄えていた寺院に「古法華（ふるほっけ）」があります。その創立も沿革もさっぱり判らないので、ただ寺跡としての伝説だけが残っていたわけですが、最近研究が進み、この廃寺の建設された時代がややはっきりしましたが、廃滅した時代は全く不明です。

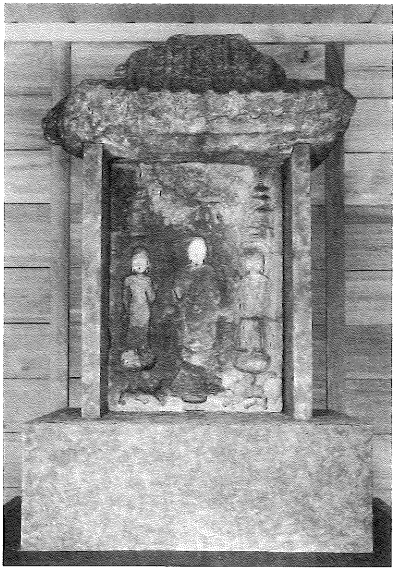
この古法華はその名から想像して、元の法華山即ち法華山一乗寺の前身であるかのように考えられていますが、そんなことは古い記録にもありませんし、法華山の行事等にもそのような関係のあったらしい痕跡（こんせき）は何一つもありません。

しかし、この「古法華」が非常に古くからあったことは、本尊の石造三尊仏（せきぞうさんぞんぶつ）が何よりもよくこれを物語っているのです。元の本堂は二間四面の瓦葺で、建物は明治中頃のもので、庫裡（くり）は風雨に朽ちはてたままになっていました。私がその本堂に安置されている「本尊の石造三尊仏」を初めて拝んだのは、明治三十五年頃で、多分小学校一年のお正月の寒い寒いあられのふる冬の日であったと覚えております。ちょうど午前九時過ぎでしょうか、古法華へ参詣するのだからといって、（平日は普通の草履（ぞうり）をはいていたのだが）紙の鼻緒のついた草履をはいて祖父に連れられて三口猫ヶ谷より山越えに参拝しました。それが年一度の古法華の護摩供養のお祭りであったのです。生まれて初めて見る護摩供養は、すべて驚異そのもので、山伏（行者）の服装、

持物、火渡りなどみなめずらしいものでした。その時の行者さんの人数は十二、三人位で、石造三尊仏は護摩をたく場所、即ち本堂前の広場まで引き出され、斜に立てかけられて、火炎が時々三尊仏を包んでいたように思います。周囲には戸店（土産物屋）が五、六軒も並んで、見物人は約三百人前後、その場に満ちあふれていたと覚えております。また帰りにはその戸店で「ニッキシュウ」や「五厘の饅頭」を買ってもらったうれしい記憶があります。

さて、古法華の本尊三尊仏は、高さ約九十四センチメートル、幅約七十センチメートルの板石に彫刻されたもので、こうしたいわゆる板碑（いたび）型の石仏として、その作の優秀な点と時代の古い点では、日本一であるという折紙がつけられます。ただ悲しいかな、いつの時代に火災にあったのか非常に破損を受けて、本尊と両脇侍のお顔のほとんど全部と膝のあたり、天蓋（てんがい）の大部分が削落して本来の姿を永久に見ることの出来ないのは返す返すも遺憾にたえません。それにしても、現存の部分だけでも千余年前の設計家の図案の優秀さと、石工の腕のさえには敬服せずにいられません。

なお本尊の光背はその様式が非常に古く、遠くは中国山



西省の大同石仏寺のものや河南省の竜門石窟のものに一脈通じるものがあります。我国のものでは、法隆寺金堂の薬師如来像の光背と同系統のいわゆる飛鳥時代を中心とする古い立派な仏像と共通のものをもっているのです。また、本尊は椅子に依りかかって腰をかけていられるのですが、この椅子に腰かけた仏像の例も極く古いところでは千六、七百年も前のインドアジャンター石窟内にあり、わが国では京都勤修寺にある奈良朝時代の釈迦説法図にもあります。

ともあれ、はっきりと奈良時代またはそれ以前の優れた様式をもつ貴重品であることはまちがいなく、私たち市民の誇りにしてよいものです。

この本尊石仏は、昭和三十二年から奈良博物館に収められましたが、完全に補修され、地元の熱意と要望に答えて昭和四十六年五月、久しぶりに古法華に帰って来たのです。

終りに本尊石仏は古くから観音菩薩と申されて今日に至っておりますが、中央は阿弥陀如来、右に立っているのが観音菩薩、向かって左は勢至菩薩で三尊共に光背がありますので、この形相は奈良朝特有のものです。

（播磨郷土研究第十五号　幸田幸一氏の文より抜すい）

朝日長者（東剣坂町）

昔むかし、いつの頃かははっきりとわかりませんが、剣坂町に、朝日長者というそれはそれはお金持で、ずい分権力の強い長者がいました。

この長者は、自分のしたいことで出来ない事は何もないと、いつも自慢にしていました。

ある時、村人の中に

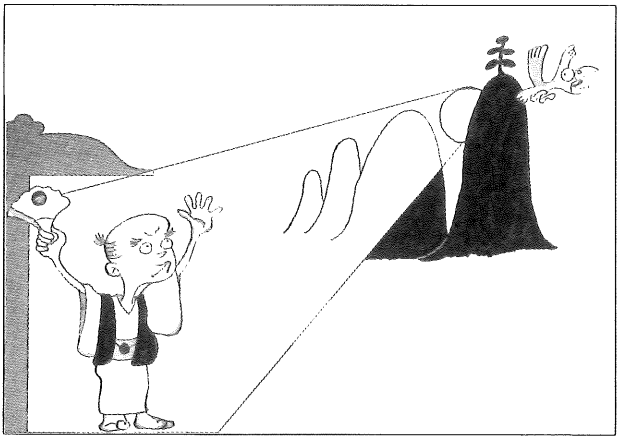
「いくら長者様でも、西に沈むお日様だけは、呼びもどすことは出来まい」

といい出す者がありました。

これを聞いた朝日長者は

「なんのなんの、出る日、入る日だとてわしの力にかなうまい」

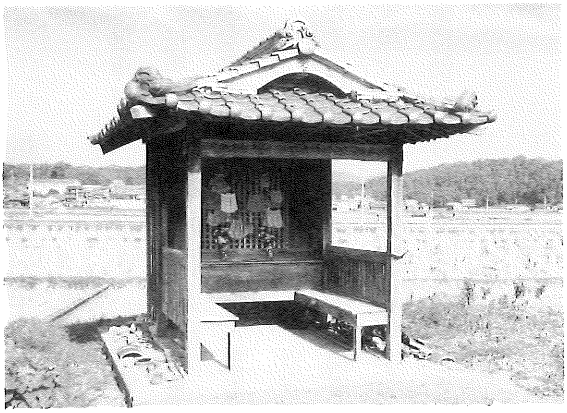
といって、折から西に沈もうとする夕日を扇で招きました。すると不思議なことに、沈みかけていた夕日がするすると天高く戻って来たではありませんか。



これを見ていた村人たちは、腰をぬかすほど驚きましたが、自分の力に酔った朝日長者は、扇を高く差し上げ、声高らかに

「もっと輝け、もっと照れ！」

と叫びました。するとどうでしょう、弱い光の夕日が、見る見るうちに輝きはじめました。



しかし、余り輝きすぎたために、朝日長者はその光に目がくらみ、間もなく死んでしまいました。

長者は死ぬまぎわに、村人たちを枕もとに集めて

「わしが死んだのち、村人が生活に困るような時には、わしの墓を掘りなさい」

といって、一通の紙切れを渡しました。それには

朝日さす　夕日かがやくこの塚に

とりめ千貫ありとこそ知れ

と書いてありました。「とりめ」とは「鳥目」と書いて、お金のことです。

今、剣坂町にある「ちょうだん堂」は、「長者堂」のことで、長者屋敷の跡だということです。

御車（みぐり）（山下東町）

御車はミグリと読んで、山下東町にある古墳のよび名である。小丘をなしていて、竹林になっている。

伝説では、允恭（いんぎょう）天皇の皇子の墓または、その乳母の墓であろうといわれているが、天武天皇が、天智天皇の皇子の謀叛によってここへ難をのがれてこられた時の仮宮の址だともいう。

この御車に人が登ったり、生えている竹を切ろうものなら、たちまち祟（たた）りがあって、病気になるといいつたえている。事実、今までに何度となく祟りのために病気になった人が出ているのである。

天保六年に地元の人がこの竹を切ったところ、たちまちにして伝染病が流行したというし、この竹を家の建築に使ったら、火災にあってしまった例があるという。まことに不思議という他ない。

（加西郡誌及び丸岡虎二氏の話より）

田富山田福寺（たづみさんでんふくじ）（山下西町）

縁起によると、山下西町にあるこの寺は聖徳太子の開基と伝えられ、後白雉（はくち）元年（六五〇）には法道仙人が伽藍を造営したものである。天武天皇の七年（六七九）の夏、天候が悪く稲に病虫害が発生して、国中の人々が悲嘆にくれたことがあり、天皇の勅願でこの寺の本尊に厄除（やくよけ）の願がかけられた。その功あって天候も回復し、病虫害が去って五穀豊饒（ごこくほうじょう）の秋を迎えることができた。人々はみな喜び、天皇は十二坊の寺院を建てられて、田富山田福寺という名を賜わったと伝えられている。そして寺は大いに栄え、盛時には三十六坊もある大寺院になったという。

しかし、後醍醐天皇の時赤松一門の浦上氏に焼かれ、その居城にかえられてしまったそうである。

（加西郡誌より）

中山の苦労堂（中山町）

昔々、平安の都から、一人のお姫さまが落ちのびてきました。お供の侍をただ一人つれて、遠く都をはなれ、西国街道を西へ西へと進みましたが、都からの追手がいつ迫ってくるかも知れません。追手をさけてわき道へそれる決心をしました。

西剣坂町大歳神社のそばから、蛇ヶ池、尼ヶ池の沢を通って逃げのびて来ましたが、気苦労と旅のつかれで、お姫さまはにわかに歩けなくなり、その場にたおれてしまいました。

もとより知る人とてなく、お医者は言うにおよばずたよるあてさえありません。お供の侍はほとほと困りはててしまいました。この場所は、今に苦労堂（くろんどう）として石の祠が残されています。

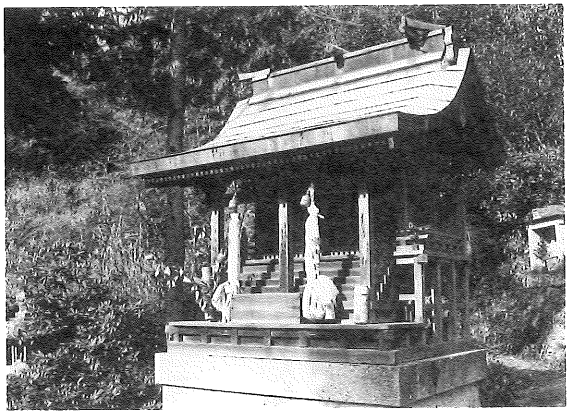
ともかく、どこか近くに家をみつけて、そこでお姫さまを休ませようと、お供の侍は姫をおぶって歩き出しましたが、五、六百メートルも歩かないうちにお姫さまの容体が急に悪くなり、どうする間もなくはかなくも死んでしまったのです。侍は泣く泣くお姫さまをその場所に葬り、石の塔婆をたて、桜の木を植えました。お姫さまを葬った場所には、今はもう桜の木も枯れ、石仏も何者かに盗まれてしまいましたが、小さな石碑と局堂（つぼねどう）という名前が残っています。

そして侍は中山の谷に入って山を開墾して田畑を開き、そこに住みつきました。すまいの近くに姫の霊を

長くとむらうためにお宮をつくって、「玉嶋姫命（たましまひめのみこと）」としてお祀りしたのです。谷の向うには馬場をつくって馬術の練習もしたようですが、都からの追手とでも戦ったのでしょうか、血のついた刀を洗ったと伝えられる血池も残っています。

中山では、この侍が後百姓となってここに永住し、渡辺氏をなのったのだといいつたえています。

なおこの苦労堂では、つい最近まで、四月八日の花の日に法華山詣りのためにここを通る人たちに、甘茶を接待していたので、石の祠の前には休み石もありますし、「いぼ」をなおして下さるというので、「いぼ」が出来た人が願いをこめてたてた紙の旗が見られます。



（渡辺章氏の話より）

潮の井（ブツブツ）（鎮岩町）

鎮岩町にある広さ約一メートル四方の井戸を「潮の井」・「ブツブツ」と呼んでいます。たいへん浅い井戸ですが、不思議なことに底からいつもブツブツと水の泡を吹いているのです。

むかしむかし、国つくりのために大己貴命（大国主の命）と少彦命が、出雲の国からこの播磨の国へやってこられました。

二人の命は大へんゆかいな神さんで、なかでも少彦命は体は小さいが智恵に満ちあふれた神でしたので、方々でとてもゆかいなことをされています。

石の宝殿で名高い生石神社は、このお二人をお祀したものですが、二人がここを通られた時、土地の人たちがケンケンと石を切っているのを見て、おもしろがってその道具を借り受け、一夜のうちに作り上げたのが石の宝殿だということです。

さて、この二人のうち少彦命は、大己貴命を播磨の国に残したまま、紀伊の国へ先に出かけることになりました。二人はたいへんな仲よしでしたので、別れをたいそう淋しく思われました。

「わたしが元気に暮らしている証拠に、熊野の浦から、毎日ここへ潮水を送りましょう」と、少彦命が約束

しました。紀伊の国についた少彦命は、大己貴命をしのびながら、潮水を送りつづけたのです。

二人の心は、この潮水によってしっかりと通じあっていたのです。

この潮水が送られて来たのが「潮の井」で、今でもブツブツと水が湧き、朝夕には満干があると伝えられています。

「潮の井」の水は神水としてあがめられ、北条町の住吉神社のお祭には、まずお神輿にこの水を注いでお祓いをしたものです。今もお神輿をかつぐ人たちは、四月二日（今は四月の第一土曜）の早朝にこの「潮の井」に行き、水垢離を取ってこの水で身体を清めるのです。また、屋台をかつぐ人たちも、「ブツブツ」の水を一升ビンに汲んで帰り、風呂の水に入れて身体を清めてから屋台をかついでいます。

（神栄宜御著「播磨郷土史の研究」及び加西郡誌参考）

「いぼとり観音」さん（福住東町）

この観音堂は賀茂小学校の裏に建立されています。いつの時代に建てられたのかわかりませんが、外観から見るかぎり、石棺の蓋に彫刻して観音像をつくったようです。

この観音さんは古くより村人や近隣の人たちにより「いぼとり観音」として信仰されております。観音さんに手を合せ願いごとを唱え、線香の灰を「いぼ」にこすりつけると不思議と「いぼ」がとれるといわれています。

この言い伝えは、昔にはお医者さんも少なく、病気をなおす為には観音さんにお願いしていたという原始宗教的なことから始まってきたように考えられます。

現在も、毎日三々五々お参りされており、お供えの花がかれたことがない程の盛況ぶりです。一度お参りされてはいかがでしょうか。

（福住東町より提供）

つるぎの宮の由来（西剣坂町）

西剣坂の王子神社は「つるぎの宮」ともよばれる。昔、空から剣（つるぎ）が降ってきたのを祀ったとも、出雲の国を開いた少彦名（すくなひこな）神が、ここで剣を投げたからとも伝える。

また、貞和の頃この地に流された広正という有名な刀鍛冶が参り、宝剣を奉納したのによるともいう。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）

ショウブの節句（上野田町）

五月五日の端午の節句を、私たちはショウブの節句とも呼んでいます。

その日は、昔から家々の軒端にショウブやヨモギを上げ、ショウブの風呂に入ったりしたからです。又、男の子は頭にショウブのはちまきをしたり、女の子は髪を編んで両方にわけ、その先をショウブで結んだりしました。夜は、ショウブを布団の下にしいて寝ました。この日は一日、ショウブのにおいがプンプンとにおったのを思い出します。

なんでも、奈良時代の聖武天皇のころ（約千二百五十年程前）、この日にショウブを飾ったという記録が残されているとかで、日本では古くからこのような習わしがあったようです。ショウブもヨモギも薬草で、かおりが強く邪気や厄をはらうものとされているため、この風習があるのだろうということを聞いたことがあります。

しかし、この風習もだんだんとすたれていくようでさびしいことです。その反対に、武者人形を飾り、鯉のぼりを立てて祝うことは、年々派手になってきているように思います。

又、この日はかしわ餅やチマキを作って食べますが、私の家ではなぜか笹まきをつくっていました。四日の夜、母がこねた粉を家中のものが輪になってつくり、五日の朝早く蒸しました。その笹のにおいを今もなつかしく思い出します。

（岩田玉子さんの話より）

あごなし地蔵（西笠原町）

阿弥陀寺の地蔵さんは、「隠岐（おき）の国のあごなし地蔵」とよばれる。それについては、次のようないい伝えが残っている。

仁明帝の承和の頃、小野篁（たかむら）は罪をえて隠岐に流された。その島で篁に仕えた郷士に徳兵衛という者がいた。その妻が頭痛を病み、七年もの間寝ついたあげく死んでしまった。篁はふびんに思い、みずから一体の地蔵さんをきざみ、墓じるしにせよと与えた。徳兵衛は大いに喜び、墓じるしとして安置し、堂を立ててねんごろにとむらったという。

その後、どうしたことか地蔵さんのあごが破損した。人々はこれを「あごなし地蔵」とよび、首から上の病気に霊験あらたかだとして、お参りする者がひきもきらなかったと伝える。

明治のはじめ頃、笠原村の平七という人が、この地蔵さんのうわさを聞き、わざわざ隠岐の島まで出かけて祈願をこめた。すると、長年苦しんでいた歯痛が、うそのようになおってしまった。平七は、地蔵さんの功徳を諸人にもしらせ、村内へ勧請して安置した。それ以来、願をかけ霊験にあずかる者が多く、遠近よりの参詣者はたえることがなかったと伝える。

この地蔵さんへの祈願は、自分の干支（えと）を書いてお堂にはり、陀羅尼（だらに）を一〇八回となえて、七日間の精進をすればよいという。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）